

〔論文〕

懐疑論はなぜ哲学の問題となり、 いかにして社会を揺るがすのか

横路佳幸

名古屋学院大学法学部

要 旨

本稿の目的は、懐疑論はなぜ哲学の問題となり、そしてそれはいかにして社会を揺るがすものとなるかを明らかにすることにある。まず、哲学の歴史において、懐疑がいかにして知的探究の原動力となり、また同時に現実から乖離した「知的遊戯」に留まってきたかを論じる。次いで、現代社会に蔓延する懐疑論が、いかにして「否定論」へと転化し、社会の分断を生み出すのか、そのメカニズムを分析する。この二つの考察を通じて、社会を蝕む懐疑論に哲学がどう向き合うべきか、そのための素描を試みたい。

キーワード：懐疑論、否定論、判断保留、不一致、知的謙虚さ

Why does skepticism matter in philosophy, and how does it threaten society?

Yoshiyuki YOKORO

Faculty of Law
Nagoya Gakuin University

はじめに

自明とされる事柄を疑う「懐疑」の精神は、とりわけ哲学において、思索を深め新たな視点を生み出すのに不可欠な原動力であった。事実、古代ギリシアの懐疑主義からデカルトの方法的懐疑に至るまで、哲学の歴史とは、いわば懐疑を通じて既存の知の体系を乗り越え、より確かな真理の礎を築こうとする試みの連続だったと言える。しかし、その一方で、玉石混交の情報が一瞬時に拡散する現代社会に目を向ければ、懐疑はしばしば異なる様相を呈する。科学的な常識や専門家の意見さえもが疑いの的となり、人々の間に不信と分断を生み出す火種にすらなっている。本来、建設的な知の探求であるはずの懐疑は、なぜ社会を蝕む病理へと変容してしまうのだろうか。この問いこそ、本稿の主題である。

この問いを考えるため、本稿は二つの視点から考察を進める。第一に、哲学の伝統における懐疑論を俎上に載せ、それがなぜ知的探究の原動力となり、また同時に現実から乖離したものに留まってきたかを論じる。第二に、現代社会に蔓延する懐疑論が、いかにして「否定論」へと転化し、社会の分断を生み出すのか、そのメカニズムを分析する。この二つの考察を通じて、社会で広がりを見せる懐疑論に哲学がどう向き合えるのか、その可能性を素描したい。

1. 日常における懐疑——波立つ心と防波堤

「疑う」ということ。それは、私たちがこの世界を生き抜く上で、いわば呼吸と同じくらい欠かせない営みである。誰もいないはずの物置から聞こえる物音に、得体の知れない気配を感じることもある。ふと目に留まった衝撃的なニュースの見出しに、「まさか」と首を傾げることもある。不確かな現実やままたらぬ他者と向き合うたび、心は波立ち揺れ動く。こうした心の揺らぎは、私たちが絶えず世界に対し小さな問いを立て続けている証左である。

他方で、一人ひとりに生じる心の揺らぎは、社会全体として見ると、秩序と安全を守る防波堤の役割をも担っている。うまい儲け話を鵜呑みにせず、病気や怪我などの不測の事態を想定し、「いつか大地震が」と万が一に備える。こうした日々の用心深さは、個人の内面を越えて社会全体で共有されることで、差し迫るリスクに立ち向かうための揺るぎない力となるだろう。たしかに他人の言葉はときに当てにならず、日常の平穏は決して盤石ではない。だからこそ私たちは、法や保険、あるいは防災といった、より確かな仕組みを築き上げてきたのだ。そうした仕組みの根底に息づくのは、無邪気な妄信でもなければ、ただの疑心暗鬼でもない。理にかなった根拠を基に、十分にありそうな可能性やリスクを冷静に見据える姿勢である。それは、「疑うべき」を疑うという意味で、地に足の着いた「健全な懐疑」にほかならない。

2. 哲学における懐疑論——精華とあだ花

仮に私たちが、いついかなる場面でも地に足の着いた懐疑心を発揮する動物だったなら、懐疑をめ

ぐる思索はこれで終わりだっただろう。実際には、私たちのうちに芽生える懐疑はいつでも健全というわけにはいかない。ひとたび波風が立った心は、次第に荒波と化す。そうなると、「信ずべき」にまで疑いの目を向けることもしばしばである。

良くも悪くも、度を越した懐疑が大っぴらに許容、いや推奨さえされるような場がこの世にある。言わずもがな、哲学の現場がそれである。哲学の歴史は常に、懐疑精神とともにあった。だがそれはただの批判精神のことではない。「それは本当か」という疑いの種を育て、それを「懐疑論」という一つの体系化された思想にまで成長させてきたのである。どんなことであっても疑おうと思えば、いくらでも疑うことができる。まさしくそんな極端な姿勢を理詰めで実践する哲学者は、その疑り深さから、これまでありとあらゆることに問いを立ててきた。

数多ある中でも、とりわけ哲学者たちの心を捉え、最も多くの議論を呼んできたのは、何をおいても外的世界や他者の心に関する懐疑論だろう。「この現実、実は壮大な夢にすぎないのではないか」「他者はみな、心を持たない精巧なロボットかもしれない」——。こうした疑念は、たしかに日常の感覚からすればあまりにも常識外れに聞こえる。しかし、よく考えてみればそれは、極端でこそあれ、何も無根拠というわけではない。

たとえば、現実と夢の違いを考えると、私たちが改めて思い知らされるのは、両者の区別がいかに困難かということである。誰もが一度は、夢を現実と勘違いしたことがあるだろう。ならば、それとまったく同じ勘違いが、いまこの瞬間に生じていないとどうして言えるのか。夢でないことを確かめようとして、自分の頬をつねったり家族や友人に尋ねたりすることは、何の助けにもならない。つねった痛みそれ自体が夢の中で作り出された感覚かもしれない、目の前の家族や友人も夢が描き出した幻影かもしれないからだ。現実かどうかを確かめる術は、この「現実」にはないのである。

似たような問題は、他者の心に思いを巡らせるときにも立ち現れる。一つ、身近な友人を例に考えてみよう。私が友人の喜びや悲しみを理解するとき、突き詰めればその根拠は、表情や言動といった外見に頼るほかない。友人が微笑めば「喜んでいる」のだと、涙を流せば「悲しい」のだと、私たちは自らの経験を基に類推する。しかし、この類推が正しいという保証はどこにもない。私が直接にアクセスできるのは、あくまで私の内面だけである。友人の内面を直接覗き込むことはできない。この一点において、友人が心を持つかのように振る舞うだけのロボットであるという可能性は、どうしても拭い去ることができない。それでもなお、私たちは他者に心があると無邪気に信じられるだろうか。

ここで強調しておくべきは、一連の懐疑論の目的は必ずしも「破壊のための破壊」ではないということだ。たしかに、この現実、夢かもしれない。身近な友人もロボットかもしれない。だがこれは何も、世界や他者を虚無として切り捨てるよう勧めるものではない。そうではなく、普段「常識」として自明視されている足場がいかに脆いものであるかを暴き出しているのである。この苦境にあって、人はどう応答するだろうか。躍起になってこれまでの常識を守り、崩れかけた足場を固め直そうとするかもしれない。あるいは、いっそ足場のない浮遊を受け入れ、どんな常識も破綻する運命にあると開き直るのも一つの手だろう。だが、ここには第三の道がある。これまでの常識を一度完全に破壊し、その上に新しい知の体系を構築し直せばよいのである。

このスクラップアンドビルドを、哲学の歴史において最もはっきりとした形で実践した人物こそ、

近代哲学の父と称されるルネ・デカルトである。彼は、知の揺るぎない土台を探し求める中で、「方法的懐疑」という手段を用いた。彼自身の言葉を借りれば、それは「何かまったく疑いようのないものが私の信念の中に残るか否かを見極めるために、少しでも疑いを差し挟むことのできるすべてのものを、絶対的に偽であるとして斥ける」(Descartes [1637] 1985, p. 127) という決意そのものであった。この方針のもと、自らの感覚、記憶、さらにはこの世界の存在に至るまで「全能の悪霊に欺かれているかもしれない」と仮定し、一度すべてを徹底的に懐疑したのである。そうして疑い尽くした末に、ある真理に辿り着く。それは、「たとえ世界が夢だとしても、そう疑っているこの私の存在だけは疑いようがない」という、かの有名な「我思う、ゆえに我あり」である。まさしくこの不動の礎石を足掛かりとして、彼は知の再建という壮大な事業に着手したのだ。デカルトにとって懐疑とは、知の体系を一から打ち立てるための「創造的破壊」そのものだった¹⁾。

かつて哲学者の永井均は、懐疑論を「哲学の華、それも精華」(永井 2006, 481頁) と評した。これは見事な表現である。度を越した懐疑論は、まさに度を越しているがゆえに常識という足場を根こそぎ覆し、世界をまったく新しい光の下で捉え直すきっかけを与える。これまで自明とされてきた「信ずべき」ものの権威を失墜させ、その内に潜む偏見や誤謬、独断を白日の下に晒すのだ。哲学の歴史が、この抗いがたい魅力を放つ「精華」の物語に彩られてきたのも、決して故なきことではない。

もっとも、永井が同じその口で、「精華」が実を結ぶことのない「あだ花」であると喝破している点は特筆しておくべきである。事実、哲学上の懐疑論はほとんどの場合、現実の脅威にはならない。書齋に籠り、どれほど強力で筋が通った懐疑論を練り上げたとしても、結局のところ私たちは翌朝には目覚ましの音を信じて起き、学校や会社の存在など疑いもせず家を出る。果てには、「他者に心などないかもしれない」という極端な可能性について、まさにその当事者たる他者と熱心に議論さえするのだ。

とどのつまり、私たちの思考がいかに度を越した懐疑に到達しようと、日々の暮らしにおける実践はそうした懐疑の徹底を許さない。この哲学的思索と日常生活との間に横たわる絶望的なまでの隔たりを、近代哲学における最も徹底した懐疑論者の一人、デイヴィッド・ヒュームは、自らの体験として次のように告白している。

人間理性に内在するこれら多様な矛盾と不完全さを凝視した結果、私の心はかき乱され、頭は混乱し、いまやあらゆる信念と理性を投げ捨てんばかりであり、いかなる意見も他の意見より確からしいとか、ありそうだとかはみなせなくなっている。(…) 私は食事をし、バックギャモンに興じ、友人と語らっては陽気に過ごす。そして、三、四時間もそうして楽しんだ後、再びこれらの思索に戻ろうとすると、それらがあまりに冷たく、こじつけがましく、馬鹿馬鹿しく思

1) デカルトが示した懐疑の建設的な側面は、現代の哲学者にも受け継がれている。たとえば、数少ない徹底した懐疑論者の一人として著名な哲学者ピーター・アンガーは、哲学の役割をまさに常識の改訂にあると考え、次のように力説している。「哲学は、私たちの世界観を手つかずのままにしておく必要などない。むしろ、発展しつつある我々の包括的な世界観を、その大部分において作り変えていく手助けとなりうるのだ」(Unger 1979, pp. 381-2)。

えて、もはやそれ以上分け入っていく気には到底なれないのである。(Hume [1739-40] 1978, 1.4.7.8-9)

ヒュームが肌で感じた懐疑論の空虚さは、より構造的な視点からも説明することができる。いかなる言葉も、それが意味を持ち適切に機能するためには、世界や他者の存在という共通の土台を前提としなければならない、その土台ごとく疑う懐疑論の言葉は、いたずらに空転するほかない、と。こうした理論と実践の埋めがたい乖離——これこそ、哲学における懐疑論が、スリリングな香りを漂わせながらもついにあだ花と化し、「知的遊戯」の域を出られない所以である。

3. 社会における懐疑論——不安を映す鏡、または反主流派の旗印

ところが、ひとたび書を捨て街に一步踏み出せば、状況はまったく違ったものとなる。現実の社会には、哲学の「あだ花」とは似ても似つかぬ、人々の生活に深く根を張った懐疑論がその蕾を膨らませている。

一つ例を挙げよう。先に見た通り、「この現実には、悪霊に欺かれて見ている夢にすぎないのではないか」という言説を耳にして、まともに取り合う大人はおそらく哲学者ぐらいだろう。かたや、次の言説はどうだろうか。「遺伝子組み換え作物 (GMO) は、巨大企業が都合のよいデータを用いて『安全』と見せかけた産物にすぎないのではないか」。こちらはただの机上の空論とは考えられていない。GMOの商業栽培が始まった1990年代以来、今なお多くの人々の心を捉え、現実の消費行動にまで影響を及ぼし続けている。

もちろん、政府や専門機関が長年積み重ねてきた検証結果を踏まえれば、GMOの安全性はすでに確立されていると言ってよい。その摂取が発がん性やアレルギー誘発のリスクを増大させたという信頼に足る報告もこれまでにない。しかし、すでに用いたフレーズを繰り返せば、「どんなことであっても疑おうと思えば、いくらでも疑うことができる」。GMOに未知の危険性が内在する可能性や、開発企業が悪意の目的で利用する可能性は、いずれも皆無であるとは断言できない。どれほど科学的に安全性が示されようと、「それでも危険かもしれない」というわずかな間隙から、懐疑論は私たちの心や生活へと深く侵入してくるのだ²⁾。

本稿では差し当たり、社会に流通し現実的な影響力を持つこうした言説を「社会的懐疑論」と呼ぶことにしたい。それは、多様な現れ方にもかかわらず、「通説への疑念」という点において通底する懐疑論である。その常套手段は、専門家による合意や科学的根拠のある定説に対して異議を申し立て、

2) 事実、2015年に米国のピュー研究所が行った調査によれば、米国科学振興協会 (AAAS) に所属する科学者の88%が「GMO食品は安全である」との見解を示している。しかし、同じ調査で「安全である」と回答した一般市民はわずか37%に留まっており、両者の間には深刻な認識の隔たりが存在する (Pew Research Center 2015)。また、同研究所が2020年に世界20の国と地域で実施した調査によれば、GMO食品を「安全ではない」と考える人々は中央値で48%にもほり、「安全だ」と考える人々 (同13%) を圧倒している (Pew Research Center 2020)。

「諸説あるのだから、結論は尚早だ」と主張することにある。こうして世に出される懐疑論は、ときに社会に渦巻く漠然とした不安を映す鏡となる。またあるときには、出所の知れない噂や怪文書として流布され、あるときには反主流派の旗印として私たちの前に姿を現す。あくまで机上の議論に留まる哲学の懐疑論とは異なり、人々の心を掴んで社会的なうねりを生むその力こそ、社会的懐疑論の際立った特徴と言えるだろう。

とはいえ、社会的懐疑論と哲学の懐疑論の間には、無視できない共通点もある。それは、「度を越している」とでも言うべき、懐疑の極端さである。その好例が気候変動をめぐる議論に見られる。昨今の（地球温暖化を含む）気候変動の主な原因が人間の活動にあるという意見は、専門家の間ですでに科学的な合意が形成されている。事実、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、2023年発表の最新の報告書で、人間の影響を「疑う余地がない（unequivocal）」と結論付けた（IPCC 2023）。しかし、社会的懐疑論者はまさにその科学的な合意やそれを支える専門知そのものに疑いの目を向ける。彼らはしばしば、一部の異論を大きく取り上げることで、科学者の間でも意見が割れているかのような印象を巧みに作り出そうとする。思えば、哲学上の懐疑論は、「信ずべき」にまで疑いの目を向け、常識を根底から覆そうとする点で度を越していた。同様に、否定しがたい科学的データや事実を前にしてもなお、「専門家が間違っているかもしれない」という針の穴を通すような可能性に固執する姿勢もまた、度を越した懐疑にほかならない。

4. 懐疑論から否定論へ——探究・判断保留・不一致

一般に、懐疑は、ひとたびたがが外れ制御が効かなくなると、たちまち暴走を始める。まるで物さへへの些細な不安が妄想の種となり、やがて「そこに何かがいる」という確信へと育ってしまうように。あるいはまた、「大地震が今後30年以内に起きるかもしれない」という合理的なリスク評価が、いつしか「今日にも起きるに決まっている」という強迫観念と化すように。舵を失った懐疑心は、しばしば妄信と見分けがつかない。それはもはや、問いを立てることよりも、問いの果てに見出した特定の「答え」に執着するようになるからである。

往々にして、「もしかしたら P かもしれない」という疑念は、次第に「本当は P に違いない」という断定に姿を変える。「 Q が正しいとは限らない」という知的な留保は、やがて「 Q は絶対に間違いだ」という排斥へと変貌する。このとき、無数にあるうちの一つにすぎなかった可能性は——それがどれほど現実化しそうにないものであっても——現実を飲み込むほどのリアリティをもって襲い掛かってくる。可能性は現実となり、常識は非常識と化するのだ。かくして、「懐疑」という坂道を転がり落ちた思考が行き着く先、それは多くの場合「否定」である。

では、なぜ懐疑はかくも容易に否定へと姿を変えてしまうのだろうか。その変容を理解するには、まず「判断保留」と「否定」という似て非なる態度を明確に区別しておく必要がある。任意の命題 P を疑う道は通常、二つに分かれている。一つは、 P が真であるとも偽であるとも信じず、中立的な立場から判断を保留する道である。この状態を、哲学の信念論理（doxastic logic）で用いられる記法で表現してみよう。ある主体（agent）を a 、その信念（belief）を B とすると、「 a が P と信じている」

ことは、 $B_a(P)$ と表される。これを踏まえるならば、判断保留という態度は、 a が P とは信じておらず、かつ P ではないとも信じていない状態、すなわち $\neg B_a(P) \& \neg B_a(\neg P)$ と定式化できる³⁾。つまり、 P を疑った末に判断保留する者は、 P の真偽について性急な結論を下すことを差し控え、いわば能動的な忍耐をもって、「本当に P か」という問いをあえて未解決なまま残し続けるのである。

他方で、 P を疑うもう一つの道は、 P の否定、すなわち P が偽であると信じることに通じている。こちらは、 $B_a(\neg P)$ という信念状態に相当するだろう。先の判断保留と異なり、 P を疑い、そして否定する者にとって、「本当に P か」という問いはもはや解決済みの事柄である。なぜならその者は、 P の真理性に同意しないという消極的な態度に留まらず、 P の虚偽性を積極的に肯定することで、 P の真偽について決着をつけているからである。

先の人為的な気候変動を例に取れば、判断保留と否定という両態度の違いはより鮮明になる。一方の判断保留は、「気候変動の主要な原因が人間活動にあるとは信じないが、そうでないとも信じない」という中立の態度に相当する。対して否定は、「気候変動の原因は人間活動などではない」という強い信念へと結び付く。この違いは、実際の行動に大きな影響を及ぼすだろう。たとえば判断保留に立つ者は、人為的な気候変動を確信していないため、炭素税のような急進的な政策には同意しないかもしれない。しかし、その可能性を完全に否定するわけでもないため、予防原則に基づき、再生可能エネルギー開発といった穏健な対策には同意する余地を残している。これに対し、否定に立つ者は、温室効果ガスの排出規制などを根拠のない不当な制限とみなし、積極的に反対するだろう。人間活動が原因ではないと固く信じる彼らにとって、気候変動対策とは社会に不要なコストを強いる愚行にほかならないからだ。このように、懐疑から生まれた二つの態度は、社会の未来を左右する政策決定の場で、決定的な分岐点を生み出すのである。

こうした違いを念頭に置いた上で、懐疑が否定に転化するという論点に立ち返るならば、その背景には少なくとも二つの要因があると考えられる。

一つは、心理的な要因である。かつてアメリカの哲学者チャールズ・S・パースは、探究 (inquiry) の原動力について次のように述べた。

疑念による苛立ちによって、信念状態を得ようともがくようになる。(…) こうしたもがきは、疑念があるところに生じ、疑念の停止によって終わりを告げる。したがって、探究の唯一の目的は意見の決着にある。(Peirce [1877] 1992, p. 114)

「疑念」の状態とは、パースによれば、「不安で落ち着かず満たされない状態」(ibid.)に相当する。

3) ただし、この定式化は判断保留の必要条件の一部ではあるにせよ、十分条件ではない。シャルル・ド・ゴールが1967年7月24日にセーヌ川沿いを散歩したかについて、私は現在それが正しいとも間違っているとも信じていないが(というより知る由もないが)、この私の状態を「判断保留している」とは普通言わないだろう(Friedman 2013)。判断保留をより正確に捉えるには、単なる信念の欠如や無知ではなく何らかの意味で「ためらいを表明する態度」が重要な役割を果たすだろうが、本稿では簡便のため、判断保留を「 P とは信じておらず、かつ P ではないとも信じていない状態」としておく。

何かを探究するとき、人は、意見が定まらず不安定な「疑念」よりも、意見が定まった「信念」という安定した状態に辿り着きたいと願う生き物である。もちろん論理的に考えれば、疑念で留まって判断を保留するという選択肢は、あらゆる探究者に常に開かれている。有神論者に対抗して神の存在を信じないからといって、ただちに「神は存在しない」と信じる無神論者に迎合する必要はない。有神論と無神論の間で態度を保留し、「神が存在するとも、存在しないとも信じない」という仕方で、中立的な立場に立つことは可能だからだ。しかし、そうした立場に立ち続けることは、まさに答えの出ない問いを抱え続け、探究をいつまでも終えられないことを意味する。この不安定で居心地の悪い緊張状態から逃れたいという強い欲求こそが、疑念という揺らぐ足場から、否定という確固たる信念への跳躍を促す。要するに、私たちの心は、知的な探究心や慎重さが要請する困難な道行きよりも、否定という結論がもたらす手近な安寧の方を選んでしまう傾向にあるというわけだ。

懐疑が否定に転化するもう一つの要因は、論理的な近接性である。「 P は真だと信じない」という不信と「 P は偽だと信じる」という否定は明らかに異なるが、無関係ではない。この関係を解き明かすのが、信念論理で広く受け入れられている無矛盾性の公理（公理D）である。これは、合理的な主体は矛盾した事柄を同時に信じないという原則を定式化したもので、 $B_a(\varphi) \rightarrow \neg B_a(\neg\varphi)$ という形で表現できる（ φ は任意の論理式を表すメタ変項）。これに従えば、「 P は偽だと信じる」すなわち $B_a(\neg P)$ から、「 P は真だと信じない」すなわち $\neg B_a(P)$ は論理的に導かれる。つまり、否定論者は必然的に、 P が真だとは信じないという懐疑論者の一面を併せ持っているのだ。特定の命題に対する不信感という点で共通している以上、懐疑論と否定論はいわば紙一重の関係にある。この論理構造が、心理的な要因と相まって、「信じない」という広い領域から「偽だと信じる」という狭い領域へ移行する一因となっているのである。

こうした複数の要因が絡み合うことで、当初は「 P が正しいか判断しかねる」という知的な留保であったはずの懐疑は、いつしか「 P は誤りである」という強固な否定へと滑り落ちる。この逆らいがたい重力に導かれるように、巷でよく見聞きする社会的懐疑論もまた、やがて否定論へと傾いていくだろう。当初こそ「気候変動の原因は人間活動とは限らないのではないか」という疑念や留保であったはずのものが、やがて「気候変動の原因が人間活動であるはずがない」という強固な否定にすり替わっていく。「昨今の気候変動には別の大きな原因があるかもしれない」は、いつの間にか「別の大きな原因があるに違いない」に様変わりする。蓋を開けてみれば、社会的懐疑論を掲げる人々は、その多くがいつしか否定論者となっているのが実情である。揺らぐ心を揺らいだままにしておくのはかくも難しい。そればかりか、否定論に至った者は「間違った通説を妄信するのは愚の骨頂」とばかりに、専門家の意見に従う人々を攻撃対象とすることさえある。

健全に機能しうるはずの懐疑が、ひとたびその身を翻して否定という確信へと至り、社会に広く根を下ろすとき、人々の間には深刻な「不一致」、すなわち意見の対立が生まれる。その舞台は、GMOや気候変動、ワクチンといった科学的なテーマから、南京事件や従軍慰安婦問題をめぐる歴史認識といった政治的なテーマにまで及ぶ。通説を受け入れる「肯定派」と、懐疑の果てにそれを拒絶する「否定派」。両者が互いへの不信感を募らせることで、単なる意見の不一致は熱を帯び、やがて社会に亀裂を刻むだろう。SNS上では互いの陣営を罵り合う言葉が飛び交い、その亀裂が家族や友人といっ

懐疑論はなぜ哲学の問題となり、いかにして社会を揺るがすのか

た身近な人間関係さえも蝕んでいくとき、もはやそれは単なる意見の対立ではない。修復しがたい「分断」そのものである。

5. 懐疑論を問題としてきた哲学は社会的懐疑論・否定論に何を言えるか

社会的懐疑論ないしは否定論が広がりを見せる状況、そして意見の不一致が分断を生んでいる状況を前にして、私たちは一体何を語りうるだろうか。いや、哲学に携わる端くれとして、私はより切実に次のように問わなくてはならない——哲学は、この現状に「他人事」でいられるだろうか、と。およそありそうにない可能性を真摯に受け止めてきた哲学者は、社会に溢れる同じくらい突飛な懐疑論や否定論を、単に「極端すぎる」の一言で片付けてしまってよいのだろうか。すでに見たように、デカルトは次のようにささやいた。「すべて間違っているかもしれない。感覚も記憶も現実も、もはや信じるに値しないのだ」。一方で社会的懐疑論者は次のようにうそぶく。「すべて間違っているかもしれない。政府も科学も主要メディアも、もはや信じるに値しないのだ」。この二つの声の間に、本質的な違いはどれほどあると言うのだろうか。

哲学上の懐疑論を重く受け止める者が、もし社会に跋扈する懐疑論と真摯に向き合おうとしないのなら、それは知的責任の放棄であると考ええる。象牙の塔に安住し、眼下の騒動を日和見的に見物するだけでは済まされない。だとすれば、いま哲学に求められているのは、社会に渦巻く懐疑や否定の言葉と格闘することなのではないか——まさにここに、哲学の社会的使命がある。

もちろんここで急いで付言しておかねばならないが、社会的懐疑論という主題は、もとより哲学一分野の専有物ではない。あるトピックについて懐疑・否定するに至る背景には、単なる科学的論争に止まらない、根深い要因が複雑に絡み合っているのが常である。マスメディアや専門知への不信、フェイクニュースの蔓延、情報リテラシーの問題、あるいは認知バイアスや特定のアイデンティティ、政治思想、そして陰謀論といった要因である。それゆえ、政治学、心理学、社会学といった多様な観点からの分析も可能であり、実際にその種の優れた研究は枚挙に暇がない。しかし、懐疑論をその歴史の精華としてきた哲学にしか果たしえない役割もまたきつとあるはずだ。

おそらくその役割とは、社会に蔓延する個々の懐疑論・否定論に対し、専門家然として「正解」を提示したり、その論理的誤謬を暴いたりすることとは根本的に異なったものになるだろう。なぜなら、社会を蝕む懐疑の根は往々にして、単なる知識の欠如や論理の誤りに留まらず、より深く、現代社会を生きる一人の人間として当然感じるはずの不安や疑問、ひいては「こうであってほしい」という切なる願望にまで達しているからである。このような領域にまで深く食い込んだ懐疑に対し、事実や論理という刃を振りかざすだけでは、かえって相手の心を固く閉ざさせ、分断の溝を深める結果を招きかねない。だとすれば、哲学がまず引き受けるべきは、白黒をつける審判者の役ではなく、むしろ**耐強い対話の調停者**としての役割ではないだろうか⁴⁾。

4) たとえば、ある科学哲学者は、科学否定論に対抗するには、科学的証拠・事実を一方的に提示する（「情報不足モデル」の）アプローチでは不十分だと指摘する。むしろ、共感・敬意・傾聴に基づいた対話を通じてま

興味深いことに、こうした哲学の役割は、科学の最も重要な精神と深く響き合う。20世紀を代表する物理学者の一人、リチャード・ファインマンは、科学の価値を次のように語っている。

科学が持つ数多くの価値の中でも、最も偉大なもの、それは「疑う自由」に違いありません。私たちが前進するためには、自らの無知を認め、疑いを差し挟む余地を残しておくことが何よりも大切だと、身をもって知りました。(…) 私たちが手にした「疑う自由」は、科学の黎明期に、権威と闘った末に勝ち取られたものです。それは非常に根深く、激しい闘いでした。「確信」ではなく、ただ「問い、疑うこと」を許されたい。私たちの願いは、それだけだったのです。(…) あらゆる可能性に開かれていること自体がチャンスであり、未知の領域へ進むためには、疑いと議論が不可欠だったのです。(Feynman 1955, pp. 14-15)

ファインマンの言う「疑う自由」とは、自らの知識が不完全である可能性を常に認め、あらゆる定説にさえ再検討の扉を開き続ける、謙虚にして誠実な知性のあり方を指す。そしてこれこそ、哲学がその長い歴史を通じて培ってきた作法、すなわち「知っていると自分が思い込んでいること」を徹底的に疑う営みそのものである。デカルトが悪霊の懐疑に至るまで自己の知の足場を徹底的に解体したように、哲学的な懐疑とは、他者に先んじて、まず何よりも自分自身の信念の基盤を問いただす内省的なものだった。この「自己への懐疑」の経験から生まれる知的態度は、一般に「知的謙虚さ (intellectual humility)」と呼ばれうるものだろう。それは、自らの知識の限界を弁え、安易な断定を避け、異なる視点にも真摯に耳を傾けようとする姿勢のことである⁵⁾。この謙虚さこそ、専門知や論理性を盾に懐疑論者・否定論者を一方的に断罪する傲慢な態度とも、自らの信じる異説に固執する頑なな態度とも一線を画す、真の哲学的対話の出発点となる。

この知的謙虚さを携えた哲学は、社会を分断する両陣営の言葉をつなぐ通訳者となりうる。一方に

ず信頼関係を築き、その上で否定論者が用いる特有の「推論プロセス」(証拠のチェリーピッキング、陰謀論的思考など)の欠陥を穏やかに問うことこそが、彼らの信念に揺さぶりをかける鍵となると論じている(マッキンタイア 2024)。しかし私は、たとえ社会的懐疑論者・否定論者の思考プロセスや信念がいかに不合理で矛盾に満ちたものであっても、それを積極的に否定し揺さぶりをかけることにはためらいを覚える。その理由とは、個々人が何を信じるかの「知的な自律性」は絶対的に尊重されるべき価値であり、不十分な証拠に基づいて何かを信じること自体は「不正」でも何でもないように思われるからである。よって、共感・敬意・傾聴に基づく「対話」というマッキンタイアのおおまかな方針には賛成であるものの、対話を通じた他者の信念に対する「介入」には極めて慎重であるべきだと私は考えている。

- 5) これまで知的謙虚さを正確に定義する試みは哲学・心理学で数多くなされてきたが、それは単一の特性というよりも、複数の特性が組み合わされた複合的なものだろう。実際、ある心理学者たちは、以下の四つの因子から構成される知的謙虚さの包括的尺度を開発している(Krumrei-Mancuso and Rouse 2016)。(1) 知性と自我の分離(知的に間違っている、人としての価値が下がるわけではないと考える側面)、(2) 他者の視点への敬意(自分と異なる意見にも価値があり、正しい部分があると認める側面)、(3) 自説を修正するオープンさ(新しい証拠や優れた議論に直面した際に、自分の考えを変えることを厭わない側面)、(4) 知的過信の欠如(自分の知識の限界を認識し、「自分は何でも知っている」とは思わない側面)。

は、科学的データや専門的知見を語る言葉がある。もう一方には、不安や不信、疎外感といった感情を語る言葉がある。哲学は、これら異質な二つの言語がなぜすれ違うのかを分析し、その背景にある「世界をどう捉えているか」という根本的なフレームワークの食い違いを明らかにすることができるだろう。それは、「正しいのはどちらか」や「どちらがより合理的か」を決めるものではなく、あるいは、互いの隔たりを埋めがたいものとみなし、「意見の不一致で一致する (agree to disagree)」ことで議論を収束させることでもない。むしろ、「なぜそう信じるに至ったのか」という双方の思考の道筋を、敬意をもって丁寧に再構成する作業である。その眼目は、一見すると不可解な他者の主張の背後にも、その人なりの一貫した論理や切実な関心が存在することを認める点にある。すなわち、相手を「話の通じない非合理的な存在」として排除するのではなく、自分自身もまた誤りうる不完全な足場に立っている事実を自覚し、相手を「不確実な世界を解釈しようと努める、一人の理性ある人間」として再発見することにほかならない。この他者に対する最低限の敬意と承認こそが、分断された言葉の間に対話の可能性を再び開くための、不可欠な前提となるからである。

もちろん、これは気の遠くなるような作業で、成功の保証はどこにもない。いや、実際のところ再構成に失敗するのがほとんどだろう。しかし、社会的懐疑論ないしは否定論によって引き裂かれた人々の間で、対話というささやかな希望の糸を紡ぎ出すための知恵と作法を提供することならできるはずだ。意見の対立が極まり、社会に亀裂が刻まれる不毛な現実を前にして、もう一度、共通の問いのテーブルに着くことの重要性を中立の立場から謙虚に説き続けること。それこそが、懐疑論を「精華」としてきた哲学が、その花を単なる「あだ花」で終わらせないために果たすべき、最も重い責務なのである。

この重責を担うための具体的な道筋の探求は、なお多くの紙幅を要するだろう。本稿ではその問題の輪郭を素描するに留め、より詳細な検討は、稿を改めて論じることにしたい。

参考文献

- Descartes, R. [1637] 1985, *Discourse on the Method*, in *The Philosophical Writings of Descartes*, Vol. 1, J. Cottingham, R. Stoothoff and D. Murdoch (trans.), Cambridge: Cambridge University Press.
- Feynman, R. 1955, "The Value of Science", *Engineering and Science* 19, 13–15.
- Friedman, J. 2013, "Suspended Judgment", *Philosophical Studies* 162, 165–181.
- Hume, D. [1739–40] 1978, *A Treatise of Human Nature*, L. A. Selby-Bigge (ed.), P. H. Nidditch (rev.), Oxford: Clarendon Press.
- IPCC 2023, "Summary for Policymakers", in *Climate Change 2023: Synthesis Report. Contribution of Working Groups I, II and III to the Sixth Assessment Report of the Intergovernmental Panel on Climate Change*, Core Writing Team, H. Lee and J. Romero (eds.), IPCC, Geneva, Switzerland.
- Krumrei-Mancuso, E. J. and Rouse, S. V. 2016, "The Development and Validation of the Comprehensive Intellectual Humility Scale", *Journal of Personality Assessment* 98, 209–221.
- リー・マッキンタイア 2024 『エビデンスを嫌う人たち：科学否定論者は何を考え、どう説得できるのか?』, 西尾義人 (訳), 国書刊行会.

- 永井均 2006 「あとがき」, バリー・ストラウド (著) 『君はいま夢を見ていないとどうして言えるのか：哲学的懐疑論の意義』 (永井均 (監訳) 所収, 春秋社.
- Peirce, C. S. [1877] 1992, “The Fixation of Belief”, in *The Essential Peirce: Selected Philosophical Writings*, Vol. 1, N. Houser and C. J. W. Kloesel (eds.), Bloomington: Indiana University Press.
- Pew Research Center 2015, “Public and Scientists’ Views on Science and Society”, https://www.pewresearch.org/internet/wp-content/uploads/sites/9/2015/01/PI_ScienceandSociety_Report_012915.pdf (最終閲覧日 2025年10月26日)
- 2020, “Science and Scientists Held in High Esteem Across Global Publics”, https://www.pewresearch.org/science/wp-content/uploads/sites/16/2020/09/PS_2020.09.29_global-science_REPORT.pdf (最終閲覧日 2025年10月26日)
- Unger, P. 1979, *Ignorance: A Case for Scepticism*, New York: Oxford University Press.